卒業論文の要旨

論文題目	地域鉄道を維持するには
氏名	辻根辰成
メジャー	コミュニケーション学

（要旨）日本の鉄道路線は減少の一途をたどっている。特に高度経済成長期以降は、モータリゼーションの進行や地方の過疎化などにより、地域鉄道は存廃問題に直面してきた。国鉄再建や度重なる災害に耐え、生き残ってきた地域鉄道も、さらに少子高齢化が進み、感染症の長期流行による流動の減少などで苦境に立たされている。旅客収入だけでは維持することのできない地域鉄道のこれからを考えていく必要がある。

そこでまず、本論文において対象とする地域鉄道路線を明確にすることとした。その上で地域鉄道存廃問題に関する社会的経緯を確認した。主に日本の鉄道史の中で国鉄における赤字ローカル線の整理に着目し、当時のローカル線整理基準をふまえて地域鉄道を残す上での重要な基準を設定した。

次に、鉄道以外の輸送形態に着目し、それぞれの利点や導入実績を明らかにした。なかでも、鉄道の代替機関として採用事例の多い路線バスに注目した。路線バスは運行コストが安いなど利点も多いが、鉄道廃止後の代替路線バスでは旅客数が減少してしまう上に、沿線住民のイメージもマイナス方向へ向かってしまうことが明らかになった。

さらに、地域鉄道事業者による既存の収益改善の取り組みについてまとめた。国鉄から第三セクター転換後、一時的に黒字化を達成した松浦鉄道の事例では、駅数や本数を増やすことにより、新規利用者の取り込みができること、交通弱者である高齢者が地域全体として増えることにより、鉄道の存在意義が高まっていることが明確になった。

最後に、地域鉄道を維持するには欠かせないと考えられるマイレール意識に着目した。福井県のえちぜん鉄道と茨城県のひたちなか海浜鉄道の事例を取り上げ、地域鉄道の沿線住民の鉄道に対する意識が高いことの効果について考察した。その結果、地域鉄道の沿線住民が鉄道利用の有無にかかわらず、鉄道の存在意義を理解し、存続に対する行政の支援や活動に高い理解を示していることは地域鉄道の存続に大きくプラスに働くことが判明した。

これらの検討を通して、地域鉄道の存廃には沿線住民の関心と理解が何より重要であると結論づけられた。今後さらに人口減少・少子高齢化が進む地方部において、長期的な視点で維持可能で、利便性の高い公共交通インフラを地域が選択することが第一に必要である。もし鉄道を残すのであれば、地域全体で沿線住民と地域の行政が主体となって、些細なことからでもさまざまなことに挑戦し、改善を続けていくべきであろう。

（指導教員の推薦のコメント）

過疎化が進む地方において、地域住民の重要な公共インフラの一つである鉄道をどのように維持していくか、様々な事例を踏まえつつ具体的な方策を描き出そうとした労作である。実際に日本各地の多くの地域鉄道を踏破した経験と現地調査から得られた知見を踏まえ、鉄道事業者だけでなく地域住民や行政も含めた多様な主体に目配りをしながら建設的な議論を展開している点は評価される。よって優秀卒論に推薦するものである。